

『アルテの国のお姫さま』

—惑星フェリア・シリーズV—

ACT I 「フェアリー」

あたしはいったい何処にいるんだろう？昨日、寝る前に妙な螺旋模様を見たような気がするけど、もしかするとあの時点で転移していたのかも…困った…。原稿の締め切りは明日なのよお。ああ、せっかく無理言って貰った仕事なのにさ。

目を覚まして最初に目に飛び込んできたのは見たこともない天井。最近は周囲の雰囲気でそこが地球か否かが分かるようになってきた。少なくともここが地球でないことだけは間違いない。こんな寝ている間に無意識に転移するなんてのは初めてのことだけど、なってしまったものは仕方が無いか、今さらジタバタしても始まらないもん。

そうと決まれば話しは早い、まずはここが何処だか確かめなきゃ…。あたしはここに至って初めて身体を起こして自分のいる場所をジックリと見回した。

あたしは不思議な模様の絨毯が敷いてある大広間の中央にいた。電気はないみたい。窓もなさそう。部屋の四隅に松明があるだけ。だから、ここは薄暗いのか。

そして、正面に祭壇らしきものが一つ。その一段高くなっている所に少女がいる。薄手の白っぽい衣装を身にまとった少女。

「やっと来てくれたわね。待っていたわ。」

少女はゆっくりとした動作でそこから降りてくると、さもあたしがここへ来ることを知っていたかのような口調で話しかける。少なくともあたしの方はこの子に見覚えはない。そして、この上もない微笑でもって、まだ座ったままだったあたしに手を差し延べた。

「さあ、早くして、またドラゴンが暴れているのだから。」

へっ…ド・ラ・ゴ・ン？

あたしは聞き間違えたんだと思った。だって、そんな言葉が出てくるような言い方じゃないんだもん。だって、ドラゴンでしょ。あたしの思い違いじゃなければドラゴンって龍のことよね。だいたい龍って実在するものだったの？

「何をしているの？早く退治してくれないと。」

「ドラゴンを？あたしが？」

「当然でしょ。他に誰がいるというの。」

まるであたしがとんでもないことを言い出したかのような言い方。思わずごめんなさいと謝ろうかと思ってしまった。でも、違うって、絶対におかしいのは彼女のほうなんだから。

「ちょ、ちょっと待ってよ。あなたはいったい誰なの？ここは何処なのよ？なんであたしがドラゴン退治をしなくちゃいけないの？」

もう、ここで全部聞いておかないと、また彼女の独特な雰囲気に押されなような気がして一気に喋る。ここ数日の締め切り前特有のイライラが、この訳の分からないという嫌な状況によって甦ってきて、最後の方はちょっとヒステリックな言い方になったかもしれない。

でも、彼女の次の一言であたしは一気に冷静さを取り戻すことになった。

「あら、だってあなたはリュース・リア・フラウでしょう？」

まるで頭から氷水でもぶっかけられたような感じ。情けないことにこの一言でここでのあたしの運命が決まってしまったようなものだった。おそらくはここであたしが何を言い返したとしても、彼女のの前ではすべての言葉が意味のないものになってしまうだろう。

リュース・リア・フラウ…、その昔トリプタンのデータベースで調べた限りでは、伝説の少女の名として様々な次元層にその名を残しているという。ゲルベスさんもあたしのことを伝説の娘という言い方をしていた。あたしにはその正体が分かっているけど、だからと言ってそれがこの場で何かの役に立つとも思えないし、あたしとその名で呼ばれた以上、この世界ではあたしがリュースになるしかない。

「オーケー、分かったわ。でも、そのドラゴン退治とやらに行く前に、ここが何処なのかは教えて欲しいわ。」

「いいわよ。こっちへいらっしやい。」

フワッと浮き上がったのかと思うほどの軽やかさで少女は広間を歩いていく。あたしも遅れない様に反射的に立ち上がると少女を追いかけた。後ろから見るその姿はまさに妖精という言葉がピッタリ合う感じ。

大きな扉をパーッと開け光の中に飛び出した姿は言葉では表わせないほどの美しさだった。そして、次の瞬間、あたしは自分の印象が正しかったことを認識した。振り返って光の中で微笑む姿ははっきりと宙に浮いていた。

「フェアリー…。」

そう、その姿はまるでフェアリーそのもの…。

「よく分かったわね。さすがはリュースだわ。あたしの名はフェアリー・ライ・リ・アルテ。ここはアルテのあたしの館。村の人達はここをフェアリーの館と呼んでいるわ。」

納得した…。いくらあたしがリュースでもフェアリーには勝てないもの。そう、絶対に…。

ACT I 「フェアリー」

S61. 6. NOV <<H20. 12. AUG>>